モンゴル紀行 2023

2023 年 10 月

旅のチカラ研究所　植木圭二

旅行会社のパッケージツアーを使い、妻とモンゴルに行ってきた。日本からの添乗員は同行せずに現地ガイドが仕切り、モンゴルの東横インに泊まるという安・近・短のツアーだった。

第一章　モンゴルの旅が始まる

■安近短の海外旅行

今回の旅は日本から比較的近いモンゴルに 3 泊 4 日、約 10 万円という安価なパッケージツアーで、いわゆる安・近・短の海外旅行と言う類のものになる。

このツアーが安い理由は、日本からの添乗員が同行しないことや期間が短いこともあるが、宿泊するホテルが、あの“東横イン”だからだろう。

ご存知のように東横インは日本各地に 300 以上ある低価格でも安心できるホテルチェーンで、最近は海外展開もしている。モンゴルの首都ウランバートルの中心部にも 2019 年開業した東横インがあり、今回のツアーではそこに 3 連泊する。

私は海外の東横インに初めて泊まるので、それも一つの楽しみにしてこのツアーに申し込んだ。

■NEX に乗る

私と妻は久しぶりに JR の NEX（成田エクスプレス）に乗って横浜駅から成田空港に向かった。NEX 内部は広くて綺麗で、外国人旅行者が多く乗っている。言い換えれば日本人はあまり乗っていない。それは少々高い運賃なので日本人ならば他の安価な交通手段を選ぶからだろう。

【成田エクスプレスの中】

私も当初は NEX の利用は考えなかったが、今回の旅が 4 日間なので NEX を使うことを思いついた。なぜ 4 日間だと NEX を使うのかというと、JR のジパング倶楽部は 200km 以上の運賃と特急券が 3 割引になる。横浜駅－成田空港は片道 108km だが、往復で買うと 200km を超えて割引対象になり、その場合の往復切符の有効期限は 4 日間になるからだ。

これは案外盲点で知っている人は少ない。それゆえ切符を買いに行ったみどりの窓口の駅員でさえも、最初は「これは適用されません」と言ったほどだ。しかし私の 3 割引への執念が勝って、いや執念の問題ではないか、ルール通りに運用しただけのことだ。

■モンゴル行きの飛行機

私と妻は成田空港に着いて MIAT（ミアット）モンゴル航空の搭乗手続きをする列に並んだ。すると相撲取りが搭乗手続きをしている。モンゴルから日本に来ている若手力士のようで、とにかく体が大きいからすぐに目についた。

日本相撲協会では横綱・大関はファーストクラス、関脇から十両まではビジネスクラス、それよりも下はエコノミークラスと決まっているが、この力士は里帰りだからこの規定は関係しない。仮にエコノミークラスで 1 人分の席に納まらなければ 2 席を使用することになるが、JAL の場合は 2 席使用だと 2 倍ではなく 1.5 倍の運賃になる。まあそんなことは余計なおせっかいで、私が心配するものではないか。

私は MIAT の飛行機には初めて乗る。機内食や CA の対応も悪くはないが、映画のコンテンツがあまりに少ない。全部で 20 本くらいしかなく、それもモンゴル映画ばかり、さらにほとんどがモノクロで相当に古い。日本語はもちろん英語の字幕もない。

それゆえ周囲の席を見渡すと、映画を見ているのはモンゴル人だけだ。私は仕方なく飛行ルートを示す画面を見てぼんやりと過ごしていた。

そんな中、私の脳裏にある疑問が湧いてきた。成田からモンゴルのウランバートルまでの最短ルートは北朝鮮の上空を飛ぶことだが、さすがにそれはないだろう。いや北朝鮮とモンゴルの関係は悪くないはずで、1948 年に建国した北朝鮮がソ連の次に外交関係を結んだのはモンゴルだったことを考えるとそれもあるかもしれない。

私はしばし考えて、賭けをすることにした。北朝鮮上空を飛ばなかったら機内食でビールを注文し、上空を飛んだらビールを諦めるという大胆な賭けだ。

飛行機は離陸してほぼ真西に進路をとり、韓国上空を飛行して黄海に出た。つまり北朝鮮上空を飛ばなかった。私は賭けにかった。従って私は胸を張って CA にビールを注文した。しかし CA はそんな事情も知らずに、笑顔でビールを渡してくれた。

【モンゴルのウランバートルまでのルートマップ】

飛行機は中国の北京辺りで北西に進路を変えた。その北京の上空は晴れているのに曇っている。変な表現だが、何となく地上の景色がかすんで見える。それは明らかに日本や韓国上空とは異なっている。そしてこれが北京の大気汚染だということに気が付く。その証拠に北京上空を過ぎてしばらくして、日が落ち始めているのに視界が良くなった。

■空港、そしてホテルへ

モンゴルのチンギスハーン国際空港に到着する。日本でも坂本龍馬などの英雄の名前を冠した空港があるが、チンギスハーンという名前は別格の響きが感じられる。

到着ロビーには 30 代くらいの男性の現地ガイドが迎えに来ており、ここでツアー客一同が顔を合わせることになる。ガイドがリストを見ながら点呼するが 2 人足りない。彼が持っているツアー客リストを覗き込むと 22 人になっているが、20 人しか飛行機から降りてこない。彼はあちこち探し回っているが、2 人は見つからない。

かれこれ 30 分くらい待っただろうか、ガイドはどこかに電話を掛けた後、ツアー客 20 人をバスに案内した。現れなかった 2 人の旅行者は一体どうしたのだろうか。まさか置き去りにすることはないだろうから、直前に旅行をキャンセルしたのだろうと、私は勝手に解釈してバスに乗り込んだ。

空港からホテルに向かってバスは進んでいるが、日は完全に沈んでおり、辺りは暗い。日本の田舎道でも街路灯や家の灯りでもう少し明るいが、ここは街路灯もなく真っ暗で、自動車のヘッドランプのみが見える。

しばらくして「新モンゴル日馬富士学園」という日本語の看板が見えてくる。日本語なので何も違和感がなかったが、ここはモンゴルで、朝青龍や白鳳以外に日馬富士もいたことを思い出す。

街の中心に近づくに連れて渋滞が始まり、ヘッドランプの光の列も長く連なってくる。ガイドはモンゴルの渋滞はとにかく凄いと言っている。

■東横イン

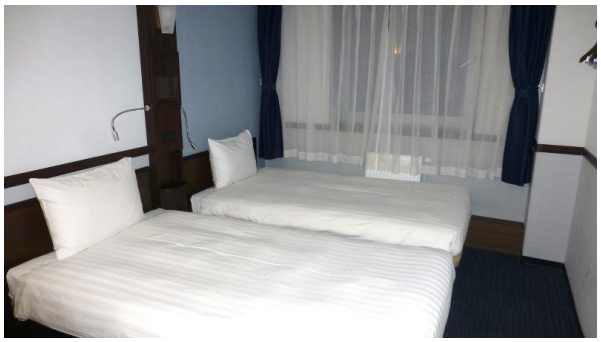
「東横イン ウランバートル」に到着する。看板は英語だが、外観は日本の東横インと変わらない。館内に入ると現地人スタッフが、片言の日本語で「いらっしゃいませ」と言ってくれる。

ロビー兼食堂は日本の東横インと同じだが、日本との違いは自販機がないことだ。そういえば海外のホテルで自販機は見かけたことがない。日本が自販機大国だということを痛感する。

ガイドがツアー客の名前を呼び、ルームキーを渡す。この時に分かったことは夫婦での参加は私たち 1 組のみ、そして母娘ペアに姉妹ペアらしき人たちがいて、あとは 1 人参加らしい。私は今まで多くの海外ツアーに参加しているが夫婦が 1 組というのは初めてのことだ。

その理由は、東横インがビジネスホテルなのでシングルルームが主体になっている。宿泊料金表を見るとツインルームの宿泊料はシングルルームの 2 倍近い。それゆえツアーの参加費用が 1 人でも 2 人でも同じだった。こんなところにも東横インのメリットがある。

部屋は日本の東横インとほぼ同じで、ツインのベッドルーム、ユニットバスには浴槽があり、便座にはウオッシュレットが付いている。これは海外のホテルでは珍しい。



【東横インのツインルーム】

【部屋から見た夜景】

ホテルに入ってからは日本に居る感覚で、妙に落ち着き、そして安心する。東横インに泊まるから安いということよりも、東横インに泊まるから安心だという気持ちに変化している自分に気が付く。

第二章　二日目

■モンゴルの朝

この時季はモンゴルの朝は氷点下になるが、ホテルの部屋は快適で日本にいるような感覚で目が覚める。防音と防寒を兼ねた分厚いサッシの窓を少し開けると、かなり冷たい空気と自動車の騒音が入ってくる。

朝食は、日本の東横インで食べるものと似ている。ビュッフェスタイルのシンプルなもので、パンと白米、野菜、サラミソーセージ、ちょっとした煮物とスクランブルエッグが並んでいる。味噌汁の代わりの塩コショウで味付けしたスープがなかなか美味だ。

ちなみに東横インではこの朝食を“無料朝食”と呼んでおり、朝食付きではなくサービスだと強調している。これによって宿泊客は朝食にケチをつけない、いやむしろ感謝する。

私は改めてネーミングの重要性を感じる。そしてそのことに感心している私は、完全に東横インの術中にはまっている。

【東横インの食堂兼ロビー】

【私が取った朝食の内容】

■ウランバートル

いよいよモンゴル観光が始まる。バスはウランバートルから約 70km 離れたテレルジ国立公園に向かっているが、ウランバートル市内は昨夜よりも渋滞がひどい。

その渋滞の主役は、日本車だ。

いや、決して日本車が悪いのではなく、異常なほどに日本車が多く走っている。

モンゴルは日本の交通ルールと反対なので、車は右側通行、従って左ハンドルのはずだが、走っている日本車はみな右ハンドルだ。そしてその大多数はトヨタ車で、中でもプリウスが半分以上を占めている。故障しない日本車、その中でも燃費の良いプリウスは人気らしい。

ガイドの話では日本の中古車をそのまま輸入して走らせているからだという。それで右ハンドルのままなのだが、それでも左ハンドルでないと乗降に具合の悪いバスやタクシーは韓国の中古車を使っている。その証拠に私たちが今乗っているこのバスはヒュンダイと書かれている。

【モンゴルの交通渋滞　日本のプリウスが圧倒的に多い】

モンゴルの国土は日本の約 4 倍、人口は約 340 万人だが、その人口の半分が首都ウランバートルに集中しているとガイドが言っている。電車や地下鉄がないから通勤にはバスか車が使われるが、最近は車が非常に増えているという。

同じアジアの暖かい国ではオートバイや三輪タクシーが使われるが、モンゴルの冬はマイナス 40℃にもなり、外気をそのまま受ける乗り物は使われない。

■スーパーマーケット

ウランバートルの外れにあるスーパーマーケットにトイレ休憩で立ち寄る。

モンゴルは野菜が採れないから野菜事情を見て来てくれと私の息子に頼まれたので、まず生鮮食品売場に行く。確かに葉物野菜は少なく、ジャガイモや根菜が多い。乳製品は圧倒的に品数が多い。肉は大きな塊で売っているが、魚は全く売っていない。

ついでにビール事情は、モンゴル産ビールのロング缶が日本円換算で約 150 円、日本のスーパードライのロング缶は約 250 円している。

【芋類や根菜、葉物野菜】

【乳製品】

■モンゴルを感じる

市街地を抜けて平原を走るようになると、白い丸いテントのゲルを多く見かける。

ゲルはモンゴルの遊牧民が暮らす移動式の家だが、私は現在のモンゴルでは定住化が進んでいるから使われていないと思っていた。ところがガイドの話では今でも多くの人々がゲルで生活をしているという。家とゲルが同じ敷地にあるものも多く見かける。それはゲルを離れのように使っているからで、例えば親世代がゲルに住み、子供世代が家に住んでいることも多いという。

道を渡る動物の群れに遭遇する。現在も遊牧民たちが放牧をしている牛、馬、羊、山羊、ヤクだという。

【平原を走る道路と遊牧されている羊の群れ　バスから撮影】

■チンギスハーンの騎馬像

エルデネという村にチンギスハーンの大きな騎馬像がある。観光用に旅行会社が造ったもので、ステンレス製で銀色に光り輝いており、馬とチンギスハーンを合わせた高さは 40m もある。台座の部分が 2 階建ての博物館で、台座も合わせると 50m は超えている。

博物館にはチンギスハーンについて様々な展示がある。彼が築いた大モンゴル帝国の最大版図が壁一面に描かれている。東西は朝鮮半島からバルカン半島まで、南北はシベリアからインド北部までだから、アジアの大部分と東ヨーロッパを支配した。世界史史上、この大きさの国は後にも先にもモンゴルしかない。

やはりこの国ではチンギスハーンは絶対的英雄なのだろう。

【チンギスハーンの騎馬像】

騎馬像は、馬のたてがみ部分まで登ることができる。登って見るとするとチンギスハーンの銀色に輝く大きな顔と対面することになり、設計者は来場者にこの対面をさせたかったのだと私は直感した。

対面と同時に周囲の景色を一望できる。周りは見渡す限り砂の平原と小高い丘のようなものばかりだから、モンゴルを肌で感じることになる。

【チンギスハーンの像との対面】

【周りの風景】

■テレルジ国立公園

テレルジ国立公園のエリアに入る。草木のあまり生えていない山に囲まれた非常に広々とした公園で、観光客が宿泊するゲルやお洒落なレストラン、放牧地が広がっている。

ここで観光客はゲルに泊まって、乗馬体験、トレッキング、BBQ、星空観賞などで楽しむらしい。そして驚くことにゴルフ場まである。ただし砂地で水がないので芝生は無く、グリーンは人工芝になっている。

この公園はそんな光景が、行けども、行けども続いている。

【テレルジ国立公園】

■モンゴル料理

昼食に公園内のレストランに入る。山の麓にある洒落た店で、観光客用の宿泊ゲルを併設している。今は観光客が少ないが、ガイドは夏のシーズン中は予約が取れないと言っている。

雰囲気の良いレストランなので、本格的モンゴル料理が期待できそうだ。

ボーズという料理は小籠包のように見える。小麦粉の皮に包まれた餡はひき肉と玉ネギでできている。肉はおそらく羊肉だろう。私の隣に座った旅慣れた感じのおばさんも羊肉だと言っている。

ホーショールという料理はハンバーグのような形をしている。ボーズと同じ材料というが全く異なるものになっている。塩コショウの味付けで結構旨い。

【ボーズとホーショールと野菜サラダ】

ついでにモンゴルのビール「ALTAN GOBI」が旨い。モンゴル南部に広がるゴビ砂漠からとった名前は、乾いた喉にビールがしみ込むイメージがする。これもまたネーミングの妙だろう。

■ゲル訪問

住民が今も実際に生活しているゲルを訪問する。外にはソーラーパネルとパラボラアンテナが設置してあり、いかにも生活感があって現役の感じがする。

中に入ると意外に明るい。窓がないから天井に設けた換気の穴だけでこの明るさは信じられない。ソーラーパネルで得た電気を蓄えるバッテリーがあってテレビもある。丸い部屋の真ん中にストーブが置かれており煙突が天井の穴に伸びている。壁にはベッドが 2 つあり、祭壇、鏡台、食器戸棚などもある。

【ゲルの外観】

【ゲルの内部】

かつてはこのゲルに家族 5 人で住んでいたというが、子供たちが独立して現在は夫婦 2 人で暮らしているとガイドが説明してくれる。

私たちツアー客 20 人がベッドや椅子に腰かけてガイドの説明を聞きながら、ゲルの主人と奥さんが接待をしてくれる。牛乳茶、一口大の揚げパン、ヨーグルトとチーズ、乳製品から造ったモンゴル酒も出てきた。もちろん全てが奥さんの手作りとのことだ。

【ゲルの天井の明かり取り】

【ゲルの中央のストーブと接待の様子】

■ガイドの話

食べたり飲んだりしている間にガイドが色々な話をしてくれる。この話がなかなか興味深い。

ゴビ砂漠では冬は－65℃、夏は＋55℃になる。ここはゴビ砂漠ではないがゲルはそれに耐えられるようになっており、湿度が低く乾燥しているから雨や雪の心配がないゆえだという。

暮らしぶりの話だけではない。大モンゴル帝国が衰退して、モンゴルは中国とロシア（旧ソ連）いう大国に挟まれ、両大国の顔色を見ながら忖度と屈辱の道を歩んできたという。

中国北部の内モンゴル自治区は、現在は中国領で面積は日本の 3 倍もある。ここにはモンゴル語を話すモンゴル族が住んでおり、モンゴルにしてみれば領土ごと住民も取られた。

旧ソ連時代もひどかったらしい。この話は後に出てくるが・・・。

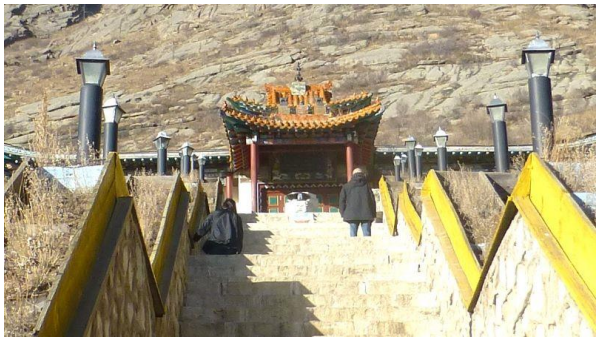
彼は中国人もロシア人も何を考えているか分からないと、ボソリと言ったのが印象的だ。

北朝鮮の脱北者の話になる。北朝鮮から逃げてモンゴルまでたどり着けずに途中の中国で捕まると北朝鮮へ送られて死刑になるが、モンゴルまで来ることができれば韓国に送られるという。やはり北朝鮮とモンゴルは友好的とはいえないようだ。これも地続きの国ならではの話になる。

■アリアバル寺院

国立公園内にはアリアバル寺院がある。岩山の斜面に造られたチベット仏教の寺院で、駐車場から本堂までは坂道と階段で、それなりに距離があり、約 20 分歩いて本堂にたどり着く。

外観は赤や黄色の原色の塗装が綺麗に残っている。日本では直ぐに色あせてしまうが、モンゴルは乾燥しているので色あせしない。本堂に入るとやはり原色の色使いで幻想的できらびやか世界が広がっている。



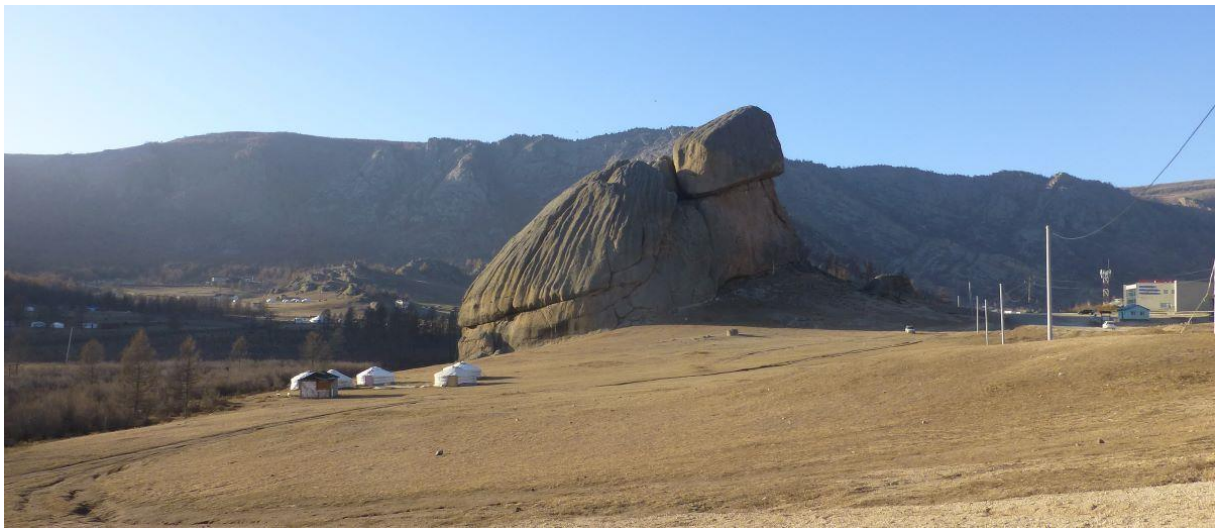
【アリアバル寺院への階段】

【アリアバル寺院の本堂内部】

■亀石

山に囲まれた国立公園内には様々な奇岩があり、アメリカの西部劇に出てくるような岩が点在している。その中には動物に似ている岩もある。

亀石と呼ばれている高さ 15m の岩は、その名のとおり亀に似ている。これも観光資源になっており、直ぐ近くに大きなゲルがあって土産物を売っている。



【亀石】

■民族衣装、民族楽器

夕食は亀石の近くのレストランで食べる。このレストランも夏の観光シーズンは予約が取れないという。

その人気の秘密が、このレストランでは民族衣装を着て記念撮影ができるという粋な計らいをしているからで、昨今のインスタ映えの時代には良いアイデアだと感心する。日本にやって来る外国人観光客が着物や浴衣に着替えて記念写真を撮るが、それと同じだろう。

ツアー客のほぼ全員が民族衣装に着替えて記念撮影に興じる。私は、いや私だけではなく全員が、モンゴル人がより一層身近な存在になったようだ。

【民族衣装に着替えて】

夕食には羊肉と白米、ジャガイモと野菜サラダが出てくる。そのサラダにはスーパーマーケットにはなかった白菜が使われている。

夕食の後は民族楽器の馬頭琴の演奏が始まる。大学生 3 人による演奏で実に見事だ。とてもアマチュアには思えない。

演奏の最後にモンゴルに伝わる発声を披露してくれた。この発声が実に凄い。やや高い声だけかと思ったら、その高い声に混じるように超高音の声が聞こえてくる。私も妻も、そして他のツアー客も初めて聞くこの発声に大興奮と大感激をして、盛大な拍手が送られた。

【大学生 3 人による民族楽器の演奏】

演奏が終わってガイドが箱を持ってきた。演奏代として 1 人 10000 トゥグリク（約 450 円）入れて欲しいと言っている。皆は惜しみなくお金を入れた。中には日本の千円札、米国の 10 ドル紙幣もあるから余程感動したのだろう。

■星空観賞

星空観賞のためにレストラン近くの人工的な光が届かない場所に移動する。モンゴルは標高が高く乾燥しているので空気が澄んでおり、街路灯もないので星空観賞には向いている。

しかし今夜は半月で、月明かりのために満天（満点）の星空とまではいかない。それでも天の川も見えているから合格点だろう。今後、友人にモンゴル旅行を勧める場合は月齢を考慮することを伝えないといけない。

星空の説明でガイドが持っていたレーザーポインタに感激する。レーザーポインタから出た光線は星に向かって一直線に 1 本の糸が繋がっているように見える。私はガイドに「レーザーポインタ凄いですね」と話すと、彼は「最近はこの光線を飛行機に当てる人がいるので使用禁止になっています」と言って、内緒ですよというポーズで人差し指を唇の前で立てた。

第三章　三日目

■日の出鑑賞

星空観賞の翌朝は日の出鑑賞になる。夜明け前にバスに乗ってホテルを出発し、ウランバートル郊外の山間にある小さな川の畔にやって来る。

昨日の亀石、そして星空、本日は日の出、この国では自然は何でも観光資源になってしまう。

日の出前だが既にかなり明るくなっている。東の山の稜線から日が出るようだが、大平原ではなくこのポイントを日の出鑑賞場所にした理由が次の瞬間に分かる。

私たちが立っているすぐ近くに線路があって、貨物列車が近づいてくる。2 台のディーゼル機関車が大量の貨車を引いている。ガイドはこの線路をシベリア鉄道だと言っている。私はシベリア鉄道とはモスクワとウラジオストクを繋ぐ鉄道だと思っていたが、そうではないらしい。

近くにいたツアー客が私に「狭義ではモスクワとウラジオストクを繋ぐものですが、広義ではモンゴルを経由して北京に繋がる線路もシベリア鉄道と呼んでいますよ」と教えてくれた。

海のないモンゴルにとってこのシベリア鉄道の輸送力は相当に重要なのだろう。妻が車両台数を数えており、全部で 87 両あったと言っている。

【シベリア鉄道と日の出直前の風景】

しかしこの国境を越える国際鉄道輸送には大きな問題がある。それは線路の幅が異なるというもので、ロシアとモンゴルの鉄道の線路幅はいわゆる広軌の 1524mm で一緒だが、中国は標準軌の 1435mm なので直接乗り入れられない。そこでモンゴルと中国の国境では全ての車両の台車の交換作業をして車輪幅を変えている。

私はそのことをレイルウェイ・ライターの種村直樹が書いた旅行記「ユーラシア大陸飲み継ぎ紀行」で読んで知っていた。この旅行記は鉄道距離 17000km の列車旅を書いたもので、ポルトガルから中国までの酒にゆかりのある町を鉄道で訪ねた紀行で、実に面白かった。

彼は既に他界しているが、その旅行記は少なからず私の旅や旅行記に影響を与えている。

シベリア鉄道の列車が去っても日の出まで多少の時間があり、ツアー客たちと旅の話で盛り上がる。－40℃の万里の長城で日の出を見た人、南極で日の出を見た人、タンザニアやチュニジアなど世界各地の日の出の話になり、尋常ではない。私は相槌を打つのが精いっぱいだった。

日の出になる。日の出とは太陽が少しでも見えれば日の出で、逆に日の入りは全部沈むことを言う。そんな定義をシベリア鉄道のことを教えてくれたツアー客が私に言ってくる。そのことは私も知っていたので軽く受け流した。そして私は彼を“定義屋（ていぎや)”と呼ぶことにした。

■ガンダン寺

ウランバートル市街地にガンダン寺という 1727 年に創建されたチベット仏教の寺がある。日の出鑑賞が終わって朝の清々しい時間にそのガンダン寺を訪れる。

【ガンダン寺】

寺では朝の修行として高僧から修行僧までが一緒に経を読むという経読みが行われている。そこに私たち観光客がずけずけと入っていくのだから申し訳ない気持ちになる。それを受け入れているチベット仏教は何と懐が深いと感心する。

寺の中央の建物には金色に輝く 25m の立派な観音立像がある。実はこの観音像は 2 代目で、初代は旧ソ連に壊されて持ち去られたという。

【高さ 25m の観音立像】

【経読みの修行】

モンゴルはかつて社会主義国家だったので宗教はご法度だった。この寺でもスターリンの指示で約 1000 人の僧侶が粛清（処刑）されたという。スターリンは旧ソ連の絶対的権力者だが、隣国のモンゴルまで指図するとは信じがたい。しかしこれが現実だったのだろう。

ガイドの話では寺の建物の出入口は必ず南側に作り、北側にはシベリアからの寒気を防ぐために出入口は作らないという。しかし私たちの目の前にある建物は北側に小さな扉がある。しかも後から取って付けたような扉だ。ガイドは粛清の時にその扉から逃げるためだと教えてくれた。

古い寺院群の隣に新しい大きな寺院が建てられており、隣にはチベット仏教を学ぶ大学も併設されている。

尚、現在のモンゴルは約 8 割がチベット仏教の教徒だという。これも定義屋が教えてくれた。

■デパート

市内のデパートにやって来る。明日は日本へ帰るので土産物を買うために 1 時間 30 分も時間をとっている。そんな長い時間要らないと思いながら店内を見ていると意外に時間が足らない。

それは革製品などの土産物以外に、いわゆる“デパ地下”には酒や食料品が何でもそろっているからで、私を含めツアー客たちの興味はそちらにあるからだ。

モンゴルに来た初日に日本円から両替した現地通貨トゥグリクが、まだ私の財布の中に残っている。デパートのレジではそれを全部出して不足分をクレジットカードで払うことができる。これによってトゥグリクを全部使い切ることができた。何しろトゥグリク紙幣を日本に持ち帰っても両替してくれる場所がない。

【デパートの外観】

■2 回目の昼食

昼食は代表的なモンゴル料理「ホルホグ」が食べられる豪華レストラン「MODERN NOMAS」に案内される。ホルホグとは骨付の羊肉を根菜や野菜と蒸し焼きにし、真ん中に熱い石が置かれる豪快な料理で、味付けはいつものように塩コショウのシンプルのものになっている。

この料理は私の口に合い、結構な分量を食べてしまった。

【レストランの内部】

【モンゴル料理のホルホグ】

■スフバートル広場

ウランバートルの中央官庁街、スフバートル広場にやって来る。この広場はかなり大きく、真ん中に騎馬像がある。騎馬に乗っている人物は 1921 年のモンゴル革命の指導者スフバートルで現在のモンゴルを築いた英雄だという。

【スフバートル広場　中央にスフバートルの騎馬像が小さく見える】

広場の前には国会議事堂があり、中央にチンギスハーンの大きな座像がある。右には息子で第2代皇帝のオゴタイハーン、左には孫の第5代皇帝フビライハーンの座像もある。チンギスハーンが大モンゴル帝国の礎を築き、残りの2人が版図を広げアジアのほぼ全土を制する大モンゴル帝国にした。

【スフバートル広場の前の国会議事堂　中央にチンギスハーンの座像】

チンギスハーンの座像を見ながら、私は妻に「さすが世界的な英雄は扱いが違うね」と言うと、妻から「日本人で世界的に有名な英雄は誰だろう？」と思いがけない質問が飛んできた。

私は「日本人の英雄、しかも世界的に有名・・・」と言いながら、少し考えたが誰の名も浮かばない。確かに日本にも戦国武将や明治維新の英雄はいたが、それは日本国内でしか通用しない人たちだ。その後も夫婦であれこれ考えるが誰の名前も出てこなかった。

では政治家でなくても世界的に有名な人物はいるのだろうか。妻が「宮崎駿か、ピカチューかな」と言ったのが印象的だ。

■国立モンゴル博物館

スフバートル広場の近くに国立モンゴル博物館がある。有史以来から現代までのモンゴルの歴史を展示している。その中でもやはり大モンゴル帝国時代の 13 世紀の展示は圧巻だ。

日本でも日本の歴史を分かり易く紹介する博物館や歴史館がないものなのか。少し調べたが、これが意外にも存在しない。

博物館の中で、ガイドがモンゴル語について説明してくれた。

モンゴル語はロシア語でも中国語でもなく、むしろ文法は日本語に似ているという。文字はかつて縦書きの文字を使っていたが、ロシアのキリル文字に統一させられたという。従ってロシア人は現在のモンゴル語を読むことができるが、意味は全く理解できないというから面白い。

そして今朝行ったガンダン寺に併設された大学ではその縦書きの昔のモンゴル文字を教えているという。

■ザイサン丘

市内の中心地に小高い丘があり、旧ソ連との友好と第二次世界大戦の戦勝を記念したコンクリート製の円形のモニュメントがある。モニュメントの内側にはナチスドイツの鍵十字や大日本帝国の旭日旗を踏みにじる絵が描かれている。これもこの国の歴史の一端なのかと感じる。

ここからはウランバートルの市内を一望できる。中心部にはマンションが建ち並んでいるが、家賃が高くて住めないので、郊外に住んでいる人が多いとガイドが言っている。郊外に住むということは通勤に車を使うので渋滞がひどくなる一方だとこぼしている。

山の麓の方にはゲルに住む住民が多く、冬はゲルの中で薪を燃やして暖をとるので煙が多く大気汚染が問題になっているという。そのため行政は夕方から夜まで電気代を無料にするという思い切った政策をとったが、あまり効果がないらしい。

【ザイサン丘のモニュメントとモンゴル市内】

■最後の晩餐

市内のレストラン「ASIAN HOT POT」で夕食になる。明日は日本に帰国するのでこれがモンゴルでの最後の晩餐になる。お客は日本人だけでなくモンゴル人も多い。

瓶ビールが 10000 トゥグリク、日本円で約 450 円、しかし珍しく生ビールがあったので、私は生ビールを注文した。生ビールは約 700 円、ウランバートルに住む人の平均月給が 4～5 万円とのことからすると決して安くはないが、ここでも富裕層のモンゴル人がいるようで、皆美味そうに生ビールを飲んでいる。

店の名前の HOT POT とは火鍋を意味するが、出てきた料理は日本の“しゃぶしゃぶ”と言った方が良い。特徴的なことは鶏肉、羊肉、牛肉が非常に薄く切ってあることと、醤油ダレの他に胡麻ダレらしきものはピーナッツバターのような味だった。

【HOT POT の“しゃぶしゃぶ”　薄く切った鶏肉】

第四章　最終日

■4 時 30 分出発

最終日は帰国するだけで、7 時 45 分の飛行機に乗るために早朝の 4 時 30 分にホテルを出発することになっており、昨晩もガイドが何度も念押しをしていた。

翌朝の 4 時 20 分、ツアー客たちはロビーに集まっているが、ガイドの姿は見えない。

約束の 4 時 30 分になってもガイドはまだ現れない。

さらに 4 時 40 になってもガイドは来ない。ツアー客の 1 人が「バスはもう来ていて、運転手もいるよ」と言うので全員が荷物を持ってバスに移動する。

運転手がツアー客のスーツケースをバスの下の荷物入れに積んでいると、運転手の携帯電話が鳴り、電話で話し始める。電話の相手は、おそらくガイド本人か、ガイドの会社の人間のだろう。

ツアー客全員がバスに乗り、運転手が乗ってきて人数を確認してモンゴル語で何か言った。運転手は日本語も英語も話せないので、おそらく「出発します」とでも言ったのだろう。彼は軽く会釈をしてバスの扉を締めて出発した。
ツアー客たちは何も聞かされないままバスは走り出し、暗い道を空港に向かう。

そういえばモンゴルに到着した時にも空港でツアー客 2 人が来ないので待っていたが、あの時もそのまま出発したことを思い出した。

■空港にて
空港に着いたが、最後までガイドは現れず仕舞いだった。この事態にツアー客たちは困惑しているものの、みな旅慣れたもので各自搭乗手続きをする。

搭乗を待っている間も、「ガイドは寝坊したのか」、「交通事故でも起こしたか」、「3 歳の子供がいると言っていたから子供が熱を出したのか」、「なぜ東横インに泊まらないのか」などと様々な言葉が飛び交っている。

そのうちガイドの話から今回のモンゴル旅行の振り返りになり、「モンゴルは意外に良かった」とか、「チンギスハーンは偉大だった」とか言っている。そしてあの定義屋がモンゴルの歴史を話始める始末だ。
誰かが「東京両国国技館の近くにある“ウランバートル”というモンゴル料理は美味しいよ」などという話になって、私はそのレストランに行きたくなりメモをとった。

第五章　帰国後

■お詫び
帰国して 2 日後、今回の旅行を申し込んだ阪急交通社から電話があった。内容は地元ガイドが最終日に行かなかった件についてのお詫で、手紙を送付するので詳細はそれを読んで欲しいというものだった。
阪急交通社はいつも旅行終了後にアンケートを実施している。私はその中で最終日のガイドの件について触れて説明を求めていた。それが旅行会社に届いたのだろうと思っていた。

翌日、手紙が速達で送られてきた。内容は、最終日にガイドが同行しなかったお詫び、その理由がガイドの寝坊だったこと、さらに迷惑料として 1 人 10000 円を支払うというものだった。
文面からすると私だけでなく他のツアー客のアンケートでも指摘され、あるいは直接電話で苦情があったのかもしれない。

私はこの素早い対応に驚き、さらにあの程度のことで10000円とは申し訳ないと恐縮してしまった。そして何よりも理由を寝坊だと素直に認めたことだ。普通ならば交通事故とか、体調不良とか言い訳をしそうだが、この素直さに私は救われた気持ちになる。

しかし現金が動くとなると、ガイドには何らかのペナルティがあるだろう。
ガイドは現地のツアー会社の社員だから、いくら大手の阪急交通社といってもそれに介入することはないとは思うが、旧ソ連がモンゴルの僧侶の粛清を指図したことが私の脳裏をかすめた。

ペナルティは分からないが、ガイドは強力な目覚まし時計をもう一つ買いに行ったに違いない。

■旅の記録

実施は2023年10月22日（日）～10月25日（水）の3泊4日、その行程を示す。

・1日目　10時自宅を出て、横浜駅から成田エクスプレスに乗って成田空港へ
14時40分発モンゴル行きMIAT航空で5時間30分のフライト、
現地時間19時15分にウランバートルのチンギスハーン国際空港到着、
21時ウランバートル市内の「東横イン」にチェックイン

・2日目　9時ホテルを出発し、スーパーマーケットに立ち寄り、テレルジ国立公園へ
チンギスハーンの騎馬像、レストランで昼食、一般人が暮らすゲルに立ち寄り
アリアバル寺院参拝、亀石を見物、夕食のレストランで民族衣装を着て記念撮影
夕食、民族楽器の馬頭琴演奏、星空観賞、21時にホテルに帰着（連泊）

・3日目　6時50分ホテル出発、7時25分に日の出鑑賞ポイント到着、一旦ホテルに戻り、
10時ホテルを出てウランバートル市内観光、ガンダン寺、ノミンデパートで買物、
市内のレストラン「MODERN NOMAS」で昼食、スフバートル広場、
国立モンゴル博物館、ザイサン丘、市内レストラン「ASIAN HOT POT」で夕食、
19時30分ホテル着（連泊）

・4日目　4時30分ロビー集合、ガイド現れず4時40分ホテル出発、空港に向かい、
7時45分発MIAT航空で成田へ、4時間55分のフライト、
13時40分成田空港着、成田エクスプレスで横浜、そして帰宅

2人の総額は約27万円、1人当たりでは約135000円になった。

・阪急交通社への払い込み（2人分）241719円（ポイント利用のため端数あり）
基本旅費は　109900円/人
サーチャージ税金など　10960円/人

・国内交通費（2人分）　約13000円

・食事の飲み物と土産物（2人分）　約15000円

尚、上記金額以外にお詫びの10000円×2が振り込まれる。